新刊紹介

イデオロギーの論理學

戸坂潤著
鐵塔書院

バートランド・ラッセルが指摘せる如く、凡そ學問の中で哲學ほど始めより多くのものを要求し、そして得るところ少かつた學問はない。タレスが万物は水であると云つてより以來、凡ての哲學者は万物の本源について論じた。そしてアナキシマンデルがそれに反對してより以來、凡ての哲學者はそれについて反對してゐる。しかもわれわれは今尙それに肯定と否定をもたなければならない。

今人々の、そして又個人の内面の「生」が問題とするものは、かゝる肯定と否定であり得るであらうか。

或は、かゝる肯定と否定そのものゝもつ不安、果してかゝる哲學が可能か何うかと云ふ「問」に、寧ろ人々は打たれるであらう。かつてカントが思惟の過去の回顧に於て懷いた不安も、又それである。しかも、われわれはカントの與へた回答そのものを、他の觀點に於て再び「問」にまでもたらすべく餘議なくされてゐる意味に於て、より深き問の虛際の中に現存在は沈みつゝある。

この時にあたつて、或ものは經濟的見地より哲學の「貧窮性」を論じ、他のものは政治的見地より哲學の「詐僞性」を論じ、又は文化的見地より哲學の「沒落性」を論ずる。聽々の聲が哲學の上に降りつゝある。

貧窮の故にのみ詐僞的であり、それが又沒落的であると云ふ、かくの如き激しき侮蔑は又と有り得ないし、それに對して哲學は久しく、餘りにも久しく耐へてゐる。それが自らの富裕の故に默殺をもつてそれに對してゐるとするならば一には人類への蔑視であると共に云はゞ惡しき貴族性を意味するであらう。又それが貧窮と詐僞と沒落の内心的肯定による沈默であるとすれば、それは人生に見出す最も耐へがたき沈默の一つである。

勿論、私は哲學の沈默がその何れをも意味するものでない事を信じたい。云はゞそれは、その何れの侮蔑に對しても、よき檢討と準備と練磨とをもつて、實に截斷的に、決定的に、壓倒的に回答を答へんための忍ばれたるそれである事を信じたい。又あられば ならぬ。

又それは倫理、宗教、教育、或は美學にも課せられたる深い問題であられば ならぬ。

この時に於て、戸坂氏の「イデオロギーの論理學」が出たことは「意味」をもつ、著者が云ふが如くんば性格的に意味をもつと云ふべきであらう。

著者は卷頭に闡明に、先づ「イデオロギーの論理學」はマルクス主義にのみぞくする、と宣言する。

この事はこの書の名が示すごとく、著者の位置を浮彫づける。それは「論理學」の名に於て、マルクス主義の或人々をして警戒的

緊張を覺えしむるであらうし、又一方「イデオロギー」の名に於て形式論理を規準とする哲學者をして故なき輕蔑の念にとらへしむるであらう。中間が最も多きとき、中間が最も甚しく敵視されるとも考へられる。何故なら人々は自己の內面に疲れたる論爭をあぐねてゐるから主張にあたつては突如、その何れかに截然と立たんと焦る。恐らくこの書の運命は先づかゝる同感されたる敵視の下に曝されるであらう。しかも一方著者が形式論理を沒落的契機として捨去らんと意圖し、他方政治的形態に向つて性格論理の接頭的契機を把持せんと試みたることに於て尙更である。

著者は論理の形式性、例へば一つの立場の上に構成されたる論理整合を目的とする論理に對して沒落的契機の名を與へる。反之、所謂性格的論理、卽內容的な政治的形態による論理を接頭的契機と名づける。いかにしてそれが沒落的型態であり、又接頭的型態であるかについては、彼は再び、「論理的型態は政治的に決定される」とのべる。それは換言すれば性格論理的に形式的か或は性格的であるかゞ決定される判である。あたかも形式論理が避くべからざる Zirkel の上に立つ樣に、彼の性格論理もハイデッガーの指摘する如き、決して Zirkel ではない Zirkel の上に立つのである。

かゝる立場なき立場の上に、科學の階級性を論じ、科學の大衆性を論じ、哲學の階級的無意識的嘘僞について論ずる。著者は時代が問題としない問はそれ自身性格性を失ふと云ふ。時の問題、それが論理それ自身を創出するのであつて、既成的問題はすでに立場を經たる問題である意味に於て形式性をもつ、立場を經ない突發的問題卽時代的問題のみが時にふさはしい性格的論理を構成すると云ふ。かゝる意味で、何れの問題もが「時の問題」である。この事は考へなほせば「時」の呈出と審判に委せられたる問題であるとも考へられるであらう。

かゝる性格性は著者もが指摘する如く、歷史的社會的現代性、云はゞ道德的事實 fait moral の下に有ゆる眞理性を隸屬せしめんとするの試みである。事實としての聖なる一回性の連續に於て、いかに永遠眞理 vérites de raison がその切斷に滑入り得るか、この事が古い論理の問題であつた。しかし、これは果してこの新しき論理の問題とするには餘りにも迂遠であるか何うか。

例へばマルキシズムの支配下の露西亞に於て、スターリンの唱ふる、又實行する五ケ年計畫に於て、さきにブハリンとの論爭、又將にあるべき委員會に於ける論爭は、何をその論理の規準となすべきであつたか。

私はこゝに著者の餘りにも彼の所謂科學の階級性の第三階梯卽自然科學のもつ重要性に注意を拂ふまいとする意識的嫌惡を見出すかの樣である。それは常に不幸にも人に向はずして自然に向つて苦鬪せるが故に怯惰と罵しられ、餘りにも根柢的報告の提供者なるが故に優柔と嘲らるゝ階級卽自然科學的技術者を遇するに餘りにも冷い態度ではあるまいか。かの露西亞が今や社會科學的研究者よりも寧ろ、自然科學的技術者を要望し、自國內に足らずして、日、獨、米にその供給をあふげる現狀に於て尙更である。

かのスターリンの五ケ年計畫は實にこの技術科學の肯否にその

論理の規準を見出すべきであつたのではあるまいか。

かの自然科學的機械科學的技術者は、かの空論的インテリゲンツの群に追込み、彼等と共に憂鬱ならしむるには餘りにも未來的であり、彼等と共に小兒病的たらしむるには餘りにも忍苦的である。彼等は彼等の函數計算表より利潤要素を消去すれば、直ちに洗はれたるグラフを準備することの出來る「可能性」である。

論理はかの社會科學的立脚地に立つよりも、もつと技術科學的立脚地に立つべきではないかと思はれる。この事は著者の論理の政治的傾倒について、寧ろ科學的反省をうながすものあるかを思はせるものがある。

辨證法への餘りにも多き關心が拂はれつゝある現代哲學も又その反省をわかつべきでもあらう。

ともあれ、爭鬪の中間に躍入することは、爭鬪そのものよりも忍苦を要求することがある。しかも現代に於てこの忍苦は尊い忍苦の一つでなければならない。著者がその最も困難なる部署についた事は何れの側よりも同感されなければならない何物かをもつてゐる。その意味で本書は獲がたき一つの事實であると共に、得られたる興味ある論理でもある。（紹介者　中井正一）

アレ并イ「ニイチエ傳」（新潮社刊）

生田　長江
野上　巖共譯

前世紀の最後の夏にその足跡を印し、今尙ほ吾々に生々しき印象を起さしめるまでに強く、いたましき生涯を描いて行つたフリードリヒ・ニイチエは、あたかも彼の苦惱の生涯の故に孤獨の哲學者の故に、その超人の思想の故に、大部分がロマンテイカーであつた所の吾が國の學徒の間では迎へよろこばれたかのやうに思はれる。現實の生產社會的生活とは何の交渉もなく、ゆとり多き環境の内にあつて貴族的な傾向に走つて居た彼等の中に在つてはひとりの生活が問題であり、ひとりの體驗が絕對であつた。そこに於ける最初の衝動はゼーンズフトとしてあらはれ哲學はエロスとして規定された。エロスは翼を持つ。理想主義的乃至は人格主義的見解が等しく世を風靡したのは偶然ではない。そしてニイチエの所謂「距離の熱情」が恰も哲學者の體面であるかの如き觀を呈した。かうした雰意氣の中にニイチエは何の批判をも受げることなく迎へよろこばれて居た樣に思へる。しかし時代は流れる、歷史は必然的に吾々の觀點を規定する。嘗てひとりの存在を問題としそれの欠如感に惱んだロマンテイケル・ニイチエに對して今は全體社會としての存在が拒否されて居るのを吾々は知つて居る。而も、それはロマンテイカーとしての體驗ではなしに現實の問題としての。

ロマンテイカーにあつてはそれへの戰ひは距離の熱情としてあり超人としてあり得たかもしれぬ。然し全體としての存在拒否は寧ろマツセとして感ぜられ、ニイチエによつて鼓舞された戰ひと勇氣とはまた別の意味を擔はねばならなくなつた。彼が隣人愛よりも一層高く評價した所の戰爭と勇氣とは、そしてまた彼が、それのためにこそ凡ての民衆は奉仕の熱愛にひたられねばならぬと